



第57回

北海道高等学校登山選手権大会

兼第62回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

2018年6月26日(火)・27日(水)・28日(木)・29日(金)

上ホロカメットク山～十勝岳・オプタテシケ山



- 主 催 北海道高等学校体育連盟・北海道教育委員会・北海道山岳連盟
後 援 美瑛町・美瑛町教育委員会・上富良野町・上富良野町教育委員会
国立大雪青少年交流の家
主 管 北海道高等学校体育連盟登山専門部・北海道高等学校体育連盟上川支部
当番校 北海道旭川北高等学校
協力校 北海道旭川東高等学校 北海道旭川西高等学校 北海道旭川工業高等学校

歓 迎 の 言 葉

当番校 北海道旭川北高等学校

校 長 山 根 克 文

第57回北海道高等学校登山選手権大会兼第62回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会の開催にあたり、ご挨拶申し上げます。全道各地区の予選を勝ち抜き、本大会へ駒を進めた選手の皆さん、ようこそ上川支部へおいでくださいました。当番校を代表いたしまして、心より歓迎申し上げます。

今年度、本大会は十勝岳連峰（美瑛町・上富良野町）を舞台に開催されることになりました。この地域は、北海道の尾根と呼ばれる大雪山系の南に連なり、美しい景観と白金温泉、十勝岳温泉など火山特有の温泉に恵まれています。今大会で登頂をめざす上ホロカメットク山、十勝岳、オプタテシケ山はいずれも標高2000m前後で一般登山者にも人気が高く、高校山岳部が本格的な登山競技を行う山としてもふさわしいと思います。本大会はインターハイにつながる大会として、選手の皆さんが一番大きな目標としてきたことと思います。これまでの努力とトレーニングの成果を遺憾なく発揮し、知識と技術の限りを尽くして最終ステージの全国大会を目指してください。

高体連をはじめとする高校生の大会には、誰にも予想できないドラマがおきたり、大きな感動に胸が震える思いをすることがあります。それは、目標に向かってひたむきに努力を重ね、最後まであきらめない姿勢で競技に臨む、そのような高校生の真摯な思いが力となり、人々の胸を打つからだと思います。選手の皆さんには、今大会を通じて、競技力の向上はもとより精神的にも人間的にも大きく成長されることを願っています。

昨年3月、栃木県でおきた痛ましい山岳事故については、いまだに記憶に新しいことと思いますが、以来、登山に関わる安全確保が大きな課題となっています。今大会におきましても、気象条件の変化、選手の体調管理、登山道の状況等を的確に把握され、安全な大会運営に努めていただくようお願いいたします。決して無理をすることなく安全第一を心がけ、場合によっては引き返す勇気を持って、楽しく充実した登山競技となることを期待します。

結びになりますが、本大会は旭川北高校が当番校を務めます。選手の皆さんが思う存分力を発揮できるよう、また、思い出に残る大会になるよう、大会運営にあたってまいりたいと考えています。本大会の運営にご協力いただきます登山専門部の皆様、各校顧問の先生方、美瑛町、上富良野町をはじめ関係機関の皆様に心より感謝申し上げます、歓迎のご挨拶とします。

大会実行委員

審査委員長 内海 健一（室蘭栄）

審査委員	【男子】	【女子】
	山 納 秀 俊（小樽潮陵）	今 井 一 穂（江 別）
	青 沼 宏（八 雲）	藤 本 和 夫（岩見沢東）
	山 下 宗 紀（旭川西）	小 俣 太（旭川東）
	青 山 泰 教（北見北斗）	木 村 宜 幸（北 広 島）
	藤 野 忠（岩見沢東）	

隊 長	【男子】	【女子】
	小 池 圭 太（旭川工）	飯 田 一 三（釧路湖陵）

副 隊 長	【男子】	【女子】
	相 田 敬 史（旭川東）	西 千 秋（北星女子）
	佐々木 亮 介（札幌北）	永 木 正 彦（帯広柏葉）

コースパイロット 桐 尾 義 之（高体連0B） 二 瓶 伸 一（高体連0B）

サ ポ ー ト	【男子】	【女子】
	牛久保 琢 哉（旭川永嶺）	丹 野 裕 之（鷹 栖）
	帰 山 悟（旭川北）	鈴 木 隆一郎（旭川北）
	木 下 英 則（旭川北）	三 沢 憲之介（旭川北）
	大 野 尊（旭川北0B）	細 野 瑛（旭川東0G）
	細 野 護（旭川北）	

通 信	旭川北	旭川北
	竹 中 正 喜（旭川北）	及 川 研一郎（旭川北）
	細 野 護（旭川北）	

ペーパーテスト 青 沼 宏（八 雲）

天気図審査 内海 健一（室蘭栄） 木 村 宜 幸（北 広 島）

現 地 本 部	旭川北	旭川北
	竹 中 正 喜（旭川北）	及 川 研一郎（旭川北）
	荒 川 道 久（旭川北）	渡 辺 瑞 恵（旭川北）
	関 村 康 則（旭川工）	澤 田 大 輝（旭川東）

大会補助 旭川北高等学校山岳部員

大会事務局

総務	竹中 正喜	及川研一郎	細野 護	鈴木隆一郎	
競技	竹中 正喜	細野 護	帰山 悟	荒川 道久	渡辺 瑞恵
輸送宿泊	細野 護	竹中 正喜	三沢憲之介	近畿日本ツーリスト	
救護	及川研一郎	帰山 悟	三沢憲之介	木下 英則	
記録	帰山 悟	鈴木隆一郎	木下 英則		
会計	中西 正邦	竹中 正喜	細野 護		

開会式

1. 開式宣言
 2. 優勝杯返還
 3. レプリカ贈呈
 4. 大会長挨拶
 5. 大会委員長挨拶
 6. 審査委員長挨拶
 7. 選手宣誓
 8. 閉式宣言
- * 当番校より連絡

閉会式

1. 開式宣言
 2. 成績発表
 3. 優勝杯・賞状授与
 4. 審査委員長講評
 5. 大会委員長挨拶
 6. 閉式宣言
- * 当番校より連絡

【講演】

「山に遊び、山に学ぶ」 高井 勝巳 氏

(高体連登山顧問OB・旭川南高等学校教諭)

大会の審査要領

1. ペーパーテスト（登山についての基礎知識） 10点（4人の平均点）
2. 行動中テスト（行動中、読図・自然等の、口頭による質問） 5点（4人の合計点）
3. 審査の配点
 - ①体力 30点
 - ②歩行 20点
 - ③装備 10点
 - ④設営・撤収 5点
 - ⑤炊事 5点
 - ⑥気象 5点
 - ⑦計画・記録 5点
 - ⑧マナー 5点

日程表

[illegible]

大会参加校数一覧

支部名	全道大会						支部大会					
	参加校数			参加者数			参加校数			参加者数		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
札幌	3	4	7	12	16	28	7	5	12	59	26	85
室蘭	1	1	2	4	4	8	2	2	4	24	8	32
小樽	1		1	4		4	2	2	4	15	2	17
南空知	1		1	4		4						
旭川	3	2	5	12	8	20	4	3	7	47	22	69
北見	1	1	2	4	4	8	2	2	4	29	10	39
十勝	1	2	3	4	8	12	3	2	5	44	12	56
釧根	1	1	2	4	4	8	2	2	4	28	6	34
函館	1		1	4		4	3	2	5	17	7	24
計	13	11	24	52	44	96	25	20	45	263	93	356

先輩の踏み跡

全国大会優秀校

回	期 日	会 場	当番高校	優勝校(男)	優勝校(女)
1	1962.7.10～7.12	大雪山系	旭川東	芦 別	旭川東
2	1963.6.29～7. 1	大雪山系	上 川	札幌南 苫小牧東	芦 別
3	1964.7. 2～7. 4	ニセコ連峰	倶知安	旭川東 小樽千秋	旭川東
4	1965.7. 2～7. 4	富良野岳・十勝岳	富良野	増 毛 遠 軽	旭川東
5	1966.6.24～6.26	十勝岳・美瑛岳 美瑛富士	美 瑛	旭川東 増 毛	旭川東
6	1967.6.22～6.24	樽前山・風不死岳 恵庭岳	苫小牧東	旭川東 北見柏陽	旭川東
7	1968.7. 4～7. 5	ウベペサンケ	帯広三条	旭川東 芦 別	旭川東
8	1969.7. 3～7. 5	芦別岳・富良野西岳	芦 別	芦 別 帯広柏葉	芦 別
9	1970.7. 2～7. 4	横津岳・駒ヶ岳	遠愛女子 函館西	標 茶 帯広農業	遠愛女子
10	1971.7. 1～7. 3	大雪山系	旭川商業	芦別工業 旭川東	芽 室
11	1972.6.29～7. 1	知床山系	北見柏陽	旭川東 北見北斗	標茶農業
12	1973.6.28～6.30	十勝連峰	旭川東	深川西 函館有斗	旭川東
13	1974.7. 4～7. 6	天狗岳・余市岳	北海道工業	函館有斗 増 毛	芽 室
14	1975.6.26～6.28	羅臼岳・羅臼湖	標茶農業	標茶農業 増 毛	標茶農業
15	1976.6.23～6.25	夕張岳(日陰の沢)	美唄工業	美唄工業 小樽工業	標茶農業
16	1977.6.22～6.24	天塩岳	士 別	旭川東 北見北斗	標茶農業
17	1978.6.28～6.30	大千軒岳	函館有斗 函館白百合 函館ラ・サール	標茶農業 小樽工業	函館白百合
18	1979.6.28～6.30	室蘭岳・カムイヌプリ	室蘭工業	ハ 雲 旭川東	函館白百合
19	1980.6.26～6.28	ニセコ連峰	小樽工業	北見北斗	北見北斗
20	1981.6.25～6.27	空沼岳・札幌岳	札幌慈恵	富良野工業 北見北斗	函館白百合
21	1982.6.23～6.25	夕張岳	夕張工業	檜山北	旭川商業
22	1983.6.23～6.25	暑寒別岳・雨竜沼	砂川南	富良野工業 ハ 雲	北見北斗
23	1984.6.21～6.23	富良野岳・芦別岳	富良野工業	帯広柏葉	北見北斗
24	1985.6.20～6.22	斜里岳・羅臼岳	網走南ヶ丘	東 川 網走南ヶ丘	網走南ヶ丘
25	1986.6.26～6.28	雄阿寒岳・雌阿寒岳 阿寒富士	標 茶	北見北斗	標 茶
26	1987.6.17～6.20	羊蹄山・アンヌプリ チセヌプリ・目国内岳	札幌新陽	小樽工業 北見北斗	旭川東栄
27	1988.6.23～6.25	ウベペサンケ山・ニベソツ山	帯広柏葉	小樽工業	旭川東栄
28	1989.6.22～6.24	駒ヶ岳・狩場山	函館中部 檜山北 遠愛女子	富良野工業 小樽工業	旭川東栄
29	1990.6.21～6.23	幌尻岳・トッタベツ岳	苫小牧東 静 内	小樽工業	旭川東栄
30	1991.6.20～6.22	羊蹄山・目国内岳・雷電山	倶知安	小樽工業 札幌稲西	江 別
31	1992.6.18～6.20	富良野岳・芦別岳	富良野	小樽工業	江 別
32	1993.6.23～6.25	夕張岳	夕張緑ヶ丘実業	旭川東 富良野工業	旭川東
33	1994.6.23～6.25	硫黄山・羅臼岳	北見北斗	旭川東	旭川東
34	1995.6.21～6.23	余市岳・無意根山	札幌稲西	旭川東 富良野工業	札幌南
35	1996.6.27～6.29	沼ノ原・トムラウシ山	帯広農業	札幌南	江 別
36	1997.6.19～6.21	恵山・海向山 白水岳～遊楽部岳	函館東 檜山北 函館ラ・サール	札幌南 札幌工業	北見北斗
37	1998.6.24～6.26	アポイ岳・ドннаップ岳	静 内	旭川東	北見北斗
38	1999.6.17～6.19	十勝連峰	富良野緑峰	札幌南 旭川東	北見北斗
39	2000.6.21～6.23	斜里岳・雄阿寒岳	釧路湖陵	札幌南	北見北斗
40	2001.6.20～6.22	羊蹄山・ニセコ山系	小樽潮陵	札幌南 札幌工業	旭川東
41	2002.6.26～6.28	美唄山・樺戸山地	美唄工業	札幌工業	北見北斗
42	2003.6.25～6.27	知床硫黄山・羅臼岳	北見北斗	北見北斗 札幌南	札幌南
43	2004.6.23～6.25	十勝幌尻岳・伏美岳 ビンバイロ岳	帯広農業	江 別	北見北斗
44	2005.6.22～6.24	無意根山・羊蹄山	札幌南	札幌南 江 別	ハ 雲
45	2006.6.21～6.23	白水岳・狩場山	函館ラ・サール	札幌南	ハ 雲
46	2007.6.20～6.22	ペンケヌーシ岳 チロロ岳	静 内	札幌南 北見北斗	北見北斗
47	2008.6.25～6.27	美瑛岳・旭岳	旭川東	旭川東	北見北斗
48	2009.6.24～6.26	斜里岳・雄阿寒岳	釧路湖陵	旭川東 札幌北	旭川東
49	2010.6.23～6.25	神威岳・烏帽子岳 札幌岳・空沼岳	札幌稲西	札幌北	旭川東
50	2011.6.21～6.24	岩内岳～目国内岳 羊蹄山	小樽桜陽	札幌北	旭川東
51	2012.6.26～6.29	ピンネシリ 南暑寒岳～暑寒別岳	岩見沢東	札幌北	北星学園女子
52	2013.6.25～6.28	斜里岳 羅臼岳	遠軽(協力校:北見北斗)	北見北斗	旭川東
53	2014.6.24～6.27	ウベペサンケ山・ニベソツ山	帯広柏葉	帯広柏葉	帯広柏葉
54	2015.6.23～6.26	風不死岳 樽前山 羊蹄山	札幌西	旭川東	旭川東
55	2016.6.21～6.24	長万部岳 狩場山	遠愛女子	旭川東	旭川東
56	2017.6.20～6.23	カムイヌプリ～室蘭岳 来馬岳～オロフレ山	室蘭栄	釧路湖陵	旭川東
57	2018.6.26～6.29	上ホロカメツク山～十勝岳 オブタテシケ山	旭川北		

全道高校体育大会参加における個人情報及び肖像権に関わる取り扱いについて

北海道高等学校体育連盟
平成30年度全道高校体育大会当番校

北海道高等学校体育連盟及び平成30年度全道高校体育大会当番校は、大会参加申込書等を通じて取得される個人情報及び肖像権の取り扱いに関して以下の通り対応します。

1 参加申込書に記載された個人情報の取り扱い

- (1) 大会プログラムに掲載されます。
- (2) 競技場内でアナウンス等により紹介されることがあります。
- (3) 競技場内外の掲示板等に掲載されることがあります。

2 競技結果（記録）等の取り扱い

- (1) 当番校が認めた報道機関等により、新聞・雑誌及び関連ホームページ等で公開されることがあります。
- (2) 大会プログラム掲載の個人情報とともに、当番校が作成する大会報告書（以下報告書という）に掲載されます。
- (3) 新記録、優勝及び上位入賞結果（記録）等は、次年度以降の大会プログラムに掲載されることがあります。

3 肖像権に関する取り扱い

- (1) 当番校が認めた報道機関が撮影した写真が、新聞・雑誌・報告書及び関連ホームページ等で公開されることがあります。
- (2) 当番校が認めた報道機関が撮影した映像が中継または録画放映及びインターネットにより配信されることがあります。また、DVD等に編集され、配付されることがあります。
- (3) この他、北海道高等学校体育連盟の許可に基づき、記念写真等が販売されることがあります。

4 当番校としての対応について

- (1) 取得した個人情報を上記利用目的以外に使用することはありません。
- (2) 参加申込書の提出により、上記取り扱いに関するご承諾をいただいたものとして対応させていただきます。
- (3) 大会役員、競技役員、運営委員、その他各種委員や補助員、当番校と大会に関する契約をしている者、大会運営関係者及び会場に来られた観客の皆様につきましては、上記取り扱いに関するご承諾をいただいたものとして対応させていただきます。
- (4) 記念写真等の販売について業者から直接当番校へ問い合わせがあった場合は、一括道高体連事務局で対応しますので業者へご連絡ください。
- (5) 個人情報等の掲載または公開等に関してのご質問は、北海道高等学校体育連盟事務局までご連絡ください。

連絡先・問い合わせ先
北海道高等学校体育連盟事務局
011-826-3300

コース概況1 上ホロカメットク山～十勝岳

上ホロカメットク山(通称 上ホロ)は夏冬通じて登られている。頂上直下には中央壁と呼ばれる絶壁が続き、ハツ手岩や化物岩とともに冬期登攀のルートとなっている。12月初旬には多くの登山者が冬山訓練や登攀に訪れる。

上ホロカメットク山の山名の語源については諸説ある。「上富良野町百年史」には、「上ホロカメットク山はペナクシ・ホル・カ・メツ・ヌブリ「十勝川・空知川本流の川上にある・後戻り川の・峰(十勝連峰)の端(深山)の・山」となる。これと対をなす、パナクシ(下)ホロカメットク山は、曲流している十勝川本流の川下(南富良野・新得町界)に所在している。空知川の水源も北から曲流しているが、石狩側には山名の伝承がなく、十勝側から望んだ山名であろうと思われる。」と記されている。十勝岳の山名はトカプチ(十勝川)の水源であることに由来する。

上ホロカメットク山(1920m)の登山は十勝岳温泉(およそ標高1270m)からはじまる。灌木が混じるハイマツの中の遊歩道を進む。ハイマツが尽きると道はヌッカクシ富良野川に降りる。川といっても普段は水が枯れている。ヌッカクシ富良野川の源頭は多くの噴気孔を持つ安政火口である。この地名は北海道を探索した松浦武史郎が安政4年に十勝岳が噴火しているのを目撃したことにちなんで名付けられた。(当時に現在の安政火口が噴火していたわけではない)

ヌッカクシ富良野川を渡ると登山道は南西方向にトラバースしながらD尾根へ登る。浅い沢地を渡ると富良野岳との分岐である。笹の生えた沢形をそのまま進むとハイマツ原となり、階段の急斜面を登る。D尾根の上部は、砂礫と背の低いハイマツの尾根であり、イワブクロ・エゾイソツツジなどの花を楽しむことができるだろう。眼下に爆裂火口である安政火口、西に富良野岳の勇姿を見ながらの登山となる。ハツ手岩を過ぎて最後の急登を登ると看板のある上富良野岳(1893m)である。イワヒゲ・ミネズオウ・メアカンキンバイなどの背の低い花畑の斜面を下り、急斜面を50mほど登り返すと上ホロカメットク山(1920m)である。ここからの十勝岳の眺めはすばらしい。90mほど下ると上ホロカメットク山避難小屋である。ここからは小さなアップダウンを繰り返しながら十勝岳(2077m)を目指す。十勝岳が近づくにつれて登山道は火山礫で歩きにくくなる。全荷の男子には最もきつい登りとなるだろう。十勝岳山頂からは美瑛岳の向こうに明日登るオプタテシケ山を望むことができる。また、上ホロカメットク山から南に続く稜線の先には三角形の下ホロカメットク山を望むことができる。下ホロカメットク山には登山道がなく、積雪期に登るのが一般的だ。日帰りは難しく、読図や生活技術を含む総合的能力が試される探検的な登山となる。君たちにも、実力をつけて挑戦して欲しい。

十勝岳の下りはグラウンド火口とすり鉢火口間の砂礫の稜線をすすむ。風向きによっては62-II火口や大正火口などからの火山ガスが届くので注意が必要だ。1926年の十勝岳噴火に伴う泥流はグラウンド火口で起きた水蒸気爆発が原因である。標高1320mには十勝岳避難小屋があり、少し下ると美瑛岳への登山道が分かれている。登山道は泥流のあとに沿って続いている。泥流で破壊された植生は、現在ではエゾイソツツジやシラタマノキなどが見られるまでに回復しており、遷移の進行をを目の当たりにすることができる。

望岳台の駐車場から、少し車道を下り左側の登山道に入る。林道跡のような道を小一時間下ると白金温泉だ。



コース概況2 オプタテシケ山

国設白金野営場からすぐゲートを通過して舗装された涸沢林道を走ると、程なく登山口が現れる。登山ポストからは造材作業道跡を歩く。作業道には雨裂が走り歩きづらいが、しばらくすると登山道を示す標識が現れる。

急な取り付きの後はアカエゾマツが植林された緩いスロープとなる。コースはそのうち根曲がり竹の笹原から針葉樹の森へと入っていく。うっそうと茂る樹、苔むした大岩、早くもナキウサギの声も聞かれ、まさに木霊でも現れそうな神聖な素晴らしい森が続く。

道はまっすぐ美瑛富士へ向かっているが山の姿は見えない。標高1141m付近で北斜面に向かってのトラバースに移り、いくつかの沢形を越えて避難小屋への登りとなってゆく。登るほどに樹高は低くなり、やがてかん木の庭園状となる。「天然庭園」と呼ばれるあたり一帯は、アカエゾマツを主体として、イソツツジ、ウスノキ、オオバスノキ、ハイマツなどが、溶岩の流れによる岩塊群に配置され、絶妙なコントラストを見せている。その下は空洞になっているところも多く、耳を澄ませば水のせせらぎが聞こえ、自然の偉大さを感じることができる。樹林限界を過ぎると、ササとハイマツの斜面で所々に残雪や岩塊群が現れ、小規模なお花畑が見られるようになり、高山の雰囲気は漂い始める。

傾斜がきつくなってくると水無川の源頭部に出る。この沢形を渡り急斜面を登り切ると平坦地となり、なかなか姿を見せない美瑛富士避難小屋が草原の中に突然現れる。水は登山道を少し戻った沢地形で取れるが、夏には涸れることが多く、当てにはできない。小屋は15人も泊まれば一杯となるが、綺麗に整備され携帯トイレブースも設置されており、快適な空間である。避難小屋正面の石垣山西斜面は、岩塊が幾重にも積み重なった壮大な景色が広がる。静かに時を過ごせば甲高い鳴き声を聞くことができるだろう。

避難小屋から南に緩く登っていくと国境稜線上の縦走路に出る。右に向かうと美瑛岳で、1時間程度で登ることができる。左に折れて石垣山に向かうが、小屋から中腹の岩れき帯に直接向かうはっきりした踏み跡があり目印もついている。石垣山辺りの稜線は、岩塊とハイマツそしてイワウメ、イワヒゲ、ミネズオウなどヒース状のお花畑がモザイク状に広がり、展望も利くので高山の縦走気分が存分に味わえる。コースは石垣山の頂上を通らずに、東側直下を巻いてベベツ岳とのコルへと緩く下っている。コルはかなり広い平坦地で、よく強い風が吹き抜ける。

ベベツ岳は双耳峰のような山で、本峰はオプタテシケ山側にあり、まず前衛峰に登らなければならない。西のやや急な山腹を登ると稜線に出、前衛峰をかすめてさらに細い稜線をたどるとベベツ岳だ。このあたりも随所にお花畑が広がり、コイワカガミなど珍しい高山植物を探しながら歩くのも楽しい。

目指すオプタテシケ山がひとときわ鋭く望まれ気持ちがいよるものの、大きなケルンから高度差130mほどの下りが待ち構えている。帰りはここの登りが最大の難所となる。大きな岩塊の急斜面を下りきると再び広いコルで、最後の大きな200mの登りが眼前に立ちはだかっている。岩塊、ハイマツそしてヒースのお花を縫って道は続き、傾斜は次第に増してくる。ようやく登りつめたと思ったら、そこは前(西)峰でがっかりするが、切り立つような西壁の様子が良く望まれ、ゾクゾクするような景観である。いったん少し下って細い稜線をさらに100m慎重に登り切れば、今度は本当のオプタテシケ山頂上である。山名の由来はアイヌ語で「槍がそこにそり立っている山」の意だそうである。アイヌ民族の伝説では、来年の全道大会の会場である雌阿寒岳と夫婦山だったという説があり、縁を感じるところである。

北東には縦走路が続き、双子池キャンプ指定地、コスヌプリ、三川台、トムラウシ山へと続く。北西斜面は急峻な崖で冬季登攀ルートとなっている。南東斜面は比較的緩やかで、残雪期には新得からの山スキーによる登山者をみることがある。

山頂からの展望は素晴らしい。縦走路方向に目を向けると、奥に見える旭岳から広大な大雪山が広がり、右には口を開けたトムラウシ山が悠然と聳える。その右には東大雪の山並みが広がり、鋭峻なニペソツ山がひととき目を惹く。来し縦走路に目を向けると十勝連峰の山が立ち並び壮観である。

祝

第57回 北海道高等学校登山選手権大会
兼

第62回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

2018年6月26日～29日

上ホロカメットク山～十勝岳・オプタテシケ山



北海道、山、店 秀岳荘

<http://www.shugakuso.com>

メモ

表紙写真 下ホロカメットク山から見た十勝連峰とトムラウシ山 (撮影：竹中 正喜)
挿絵(6 ページ) 十勝連峰 (絵：照井 嘉一)